

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

東南アジア・オセアニア：
海辺のくらしと物質文化データベースの紹介とその
制作過程＜基幹研究＞：
海域アジアにおける人類の海洋適応と物質文化：
東南アジア資料を中心に＞

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2022-10-03 キーワード: 作成者: 小野, 林太郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009909

東南アジア・オセアニア

—海辺のくらしと物質文化データベースの紹介とその制作過程

小野 林太郎

本プロジェクトの目的

フォーラム型情報ミュージアムプロジェクトの1つとして2019年度よりスタートした本プロジェクトは、3年間のプログラムとして2021年度末に終了した。本プロジェクトの1つの目的は、東南アジア島嶼部を中心とする海域アジアとその周辺海域における海と深く関わる本館の所蔵資料を、多言語（日本語・英語）でデータベース化することにあった。その実現とデータベースの充実化のため、本プロジェクトでは、海域アジアとその周辺における海洋適応の歴史と文化に関する基礎的な情報を、現地調査や文献調査からも収集してきた。

本館の所蔵資料のうち、本プロジェクトが第一に対象としたのは東南アジア関連の資料である。ただし先史時代から東南アジアは大きな人の移動を受けてきたため、周辺地域の関係資料ともリンクさせる必要があった。とりわけ東南アジア島嶼部と同じオーストロネシア語圏に属するオセアニアにおける標本資料とのリンクが最重要となった。そこで本プロジェクトでは、東南アジア島嶼部を中心とした所蔵資料のデータベース化に続く形で、オセアニアで収集されてきた関連標本のデータベース化も目指してきた。

本プロジェクトの2つ目の目的が、本館の所蔵資料を軸として、その収集先の国々における博物館や専門家との情報交換ネットワークや研究協力体制の強化である。この目的の下、本プロジェクトでは初年度より国際ワークショップを開催し、また各国の関連博物館の訪問などを実施してきた。残念ながら、2年目からは世界的な新型コロナウイルスのパンデミックにより、オンサイトでのワークショップや現地訪問はいずれも不可能となってしまったが、オンラインでのワークショップや情報交換という形で継続することとなった。

ここでは、これら2つの目的の下に本プロジェクトが試みしてきた活動とその成果を各年度別に報告したうえで、最終的な成果と今後の展望について触れたい。

2019年度の成果

初年度における成果は大きく分けて2つある。1つは本館が所蔵する東南アジア島嶼部における海洋文化関連の資料（漁具・船関連）のデータベースをほぼすべて英語化し、ウェブ版のデモまで作成できた点があげられる。2つ目の成果とし

ては、このデータベースを軸にインドネシア、マレーシア、フィリピンにおける海洋文化の専門家を交え、資料の実見に基づく検討と海洋文化研究の推進も目的とした国際ワークショップを2020年2月に本館にて開催し、データベースおよび研究の両方をさらに発展できた点があげられよう。また初年度に国際ワークショップを開催できたことは、その後のパンデミックによる影響で海外調査や国際会議などの開催がほぼ不可能となった状況を踏まえるなら、本プロジェクトにとって非常に重要な役割を担うことになったと評価できる。

2020年度の成果

2年目の成果としては、初年度に構築した東南アジアの海洋文化に関するデータベースを軸に2回目の国際ワークショップをオンラインにて開催できた点がある。このワークショップでは、インドネシア、マレーシア、フィリピンの専門家を交え、資料の実見に基づく検討と、各国の海洋文化に関わる博物館資料や展示資料の状況に関する情報交換をさらに進めることができた。またロンドン大学の東洋アフリカ研究学院（SOAS）が展開していたプロジェクトの詳細について、担当者である Christina Juan 博士に発表してもらうことができた。このプロジェクトは、フィリピン関連の博物館資料に関するデジタルアーカイブスプロジェクトであり、その後の議論を通して、こうした海外での共通性の高いプロジェクトとの今後の連携・協力を協議できたことは大きな成果であった。

一方、データベースの発展に関しては、東南アジアに加え、オセアニア関連の海洋文化に関するデータベースの構築を開始した。結果的にミクロネシアとメラネシアを対象とする約1,600点の本館資料を2020年度中に追加することができた。またデータベースの質的向上にも取り組み、各資料における対象項目を追加したほか、関連する文献や情報についても随時追加することができた。

2021年度の成果

最終年度となる2021年度には、東南アジアとオセアニアの海洋文化（漁撈・航海・船舶技術・装飾・儀礼）に関する本館の所蔵資料を総チェックし、日本語と英語による資料台帳を完成させた。その結果、東南アジア島嶼部ではインドネシア、マレーシア、フィリピンを中心とした約800点、オ

小野 林太郎 (おの りんたろう)

国立民族学博物館学術資源研究開発センター准教授。専門は海洋考古学、東南アジア・オセアニア研究。編著書に『海域世界の地域研究—海民と漁撈の民族考古学』（京都大学学術出版会 2011年）、共編著書に *Prehistoric Marine Resource Use in the Indo-Pacific Regions* (ANU E Press 2013)、*Pleistocene Archaeology—Migration, Technology, and Adaptation* (IntechOpen 2020)、『図説—世界の水中遺跡』（グラフィック社 2022年）などがある。

セアニアにおいてはミクロネシアとメラネシアに加え、ポリネシアで収集された資料も追加した約2,200点の資料を日・英語で台帳化した。このほかに東南アジア大陸部における類似性の高い資料についても台帳化のバージョンアップを進めたほか、関連する映像資料の製作や追加も行った。

一方、データベースを基にした専門家との研究体制の発展についてはコロナの影響もあり、対面式での資料検討などを行うことができなかった。しかしメールなどを使って、国内外における海洋文化の専門家との情報交換を進めることができ、国立科学博物館、沖縄県立博物館・美術館、沖縄海洋文化館、南山大学人類学博物館、インドネシアの国立科学研究所 (LIPI)、海洋博物館、バハリ博物館、マレーシアの国立博物館、アダット博物館、マレーシアプトラ大学、フィリピンのフィリピン国立博物館、フィリピン国立大学に所属する研究者ネットワークの強化を行うことができた。

全体を通しての成果と今後の展望

本プロジェクトにおける全体的な成果としては、本館が所蔵する東南アジアとオセアニアにおける海洋文化関連の資料の日英版データベースとそのウェブ版を完成させた点があげられる。最終的に台帳化した東南アジア・オセアニア関連標本数は約3,000点を数えた。また資料の収集地となる国々の専門機関や専門家との研究ネットワークの強化や情報交換のシステム形成においても、初年度から実施した国際ワークショップなどにより進めることができた。最終年度となる2021年度には、これらの成果を踏まえた英語論文集（計5本）を国立民族学博物館研究報告の特集として投稿することもできた。2022年6月現在、この特集は掲載可の査読結果を得たうえで、刊行に向けた編集の最終段階にある。このほかに本プロジェクトを通して公表した、東南アジアやオセアニアの海洋文化に関する論文・研究ノートは約20本に及び、国内外の学会や研究集会での発表も多数ある。

また2021年度に新たに追加した関連情報として、約1分に編集した計33本の映像記録をデータベースに追加できたことも特筆できる（映像の製作・編集は海工房が担当）。これらは東南アジアやオセアニアで製作・利用される漁具や装

飾品、加工具に関する民族誌的映像記録であり、データベースと連動する形で、関連する標本資料に付随して視聴できる形に整理した。

さらに本プロジェクト終了後となる2022年度には、本プロジェクトの成果を大いに反映した企画展「海のくらしアート展—モノからみる東南アジアとオセアニア」の開催が、2022年9月8日から12月13日の期間で決定したことを追記しておきたい。また企画展後には、コロナによる状況も検討しつつ、東南アジアやオセアニアの関連機関や専門家を招き当初計画していた国際シンポジウムや関連ワークショップを何らかの形で実現したいと考えている。こうした試みにより、各国の博物館とのネットワーク強化をより進めていくことができるであろう。



ワークショップでのプレゼンテーション風景（2020年2月、国立民族学博物館、野嶋洋子撮影）



コレック舟を確認するマレーシアの専門家たち（2020年2月、国立民族学博物館、野嶋洋子撮影）